

とぎぐさ

お伽草 かつかち山の段

〔解説〕初代竹本綾之助原案・平成二十四年（二〇一二）鶴澤三寿々補曲。誰もが一度は聞いたことのあるおとぎ話をもとに、大正時代の初めに作られた新作義太夫です。大正十五年にはラジオでも放送されたという記録が残っています。近年では狸が改心して終わる、という絵本もあるようですが、この作品では、昔ながらのやや残酷な内容となっています。

〔あらすじ〕昔々、仲睦まじく暮らす老夫婦がおりました。山仕事に精出すお爺さんに悪さを繰り返す大狸がおり、怒ったお爺さんは、ついに狸を生け捕りにします。お爺さんの仲間が、お爺さんより先に狸を担いで家に届けます。「たぬき汁」にされるといふ話を聞いた悪賢い狸は、何とか逃れようと、お爺さんの戻らぬうちにお婆さんを騙し、痛めつけて殺してしまいます。お婆さんに化けた狸は、家に戻ったお爺さんに、「たぬき汁」と偽って料理したお婆さんを食べさせます。その後正体を現した狸は、お爺さんに悪態をつき、山へと逃げ帰るのでした。お爺さんがお婆さんの死を嘆いていると、そこへ兎が通りかかり、その訳を聞き狸への敵討ちを約束します。兎は山へ行って素知らぬふりで狸を柴刈りに誘い、背負った柴に火打ち石で火をつけます。背中を火傷した狸は、背中を冷やそうと海へ向かいます。兎の計略で泥船に乗せられた狸は、敢えなく海に沈み、お婆さんの敵討ちは成功するのです。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

（一般社団法人義太夫協会発行）

萬に芽生の和子がお伽草、添乳枕の片言に、むかしむかし其昔爺と婆とがあつたとき、其のくり言の糸車、まわして手繰るつみ糸の、長き齡を睦まじふ、爺が帰りを松杉の、落葉焚くなる夕けむり、折柄門へ杣仲間、

「婆様婆様」

と声高に向ふ鉢巻さし荷ひ、重い獲物を気軽者、ヤツトまかせとかつぎ込み、

「これこれ婆様やこちの爺様がゑらい手柄、鎮守の森のもゝんがア化提灯の古狸を、なんと見されやこの生捕り、われらは後の棒ちぎり、鼻は明いたり紐通し、面目ないがかつぎ役、何が先ず手柄手柄」

とほめそやせば、婆はほくほく笑顔をつくり、

「フゝそうかいのふ、したが爺が手柄と云ふものゝそなた衆が附いて居りやこそ、こりや村中の手柄ぢ

やわいの、そして爺さまは何処ぞへ行てかの」

「ライノ庄屋様へちよつくら寄つて狸話をしてくらげな、わしらは先へ届けに来た、爺さまが戻らば狸料理、ばんげは汁の振舞じゃ」

と云ふに

「狸置いたら又出なほし、存分よばれに来やうぞや」と喰わぬ内から腹つゞみ、打はやしてぞ帰り行く。後に狸はいましめの縄もゆるみも泣くばかり、婆は見る程小気味よく、

「憎いやつめやがて爺様が戻らうなら、振舞の狸汁人をあやめた天罰で人に喰はれてしもふげな」

と縄引きたてゝ古柱、くゝし付ければしほしほ涙、哀れ見せるも嘘の皮、狸は声をくもらせて

「あゝもし婆様化けおどした身のむくひ味噌汁攻めもいとわねど、穴に残した妻や子が、後の嘆きは

いか斗り思へば過し月の宴、八畳敷きの草むしろ、親子揃ふて浮れ打つ、狸ばやしも今は早破れ鼓となつたるかせめて最後の思ひ出に、聞こえぬまでも別れの鼓小手をゆるめて打たせて」

と身をもがき泣く有様に婆は性得やさしさの思ひやつて気の毒顔

「畜生でも妻子の事憎いとは云へ情は情、逆も叶はぬ命の際、爺様の戻つて来ようまで名残の鼓打たせてやろ」

と、又化かさるゝ空言と知らぬ佛気老心小手をゆるめいましめのあやふき業の綱わたり、得たりと立てたるかくし爪、驚く婆を突き倒し、起きんとするを引きすへて、思ひ知れやとかきむしる、

「あれえ爺様村の衆いの」

と、救けを呼べど声つまり、かよわき老いの甲斐も

なく折れて其のまゝ枯れすゝき、あへなく息は絶へにけり。

爺は庄屋から祝ひ酒かたげて帰る門口、

「婆戻つたぞや」

と内に入れば、

「ヲ、親仁殿今日はまあゑらい手柄」

と白化のたすきはづして腰のばし、

「捕へてござつたあの狸、料理せうは婆が役と、ついでいこしらへた狸汁、あんじよう出来て居ますぞや」

「何じやもう出来たとはゑらい手際、庄屋様からこれの祝ひ酒、村の衆も今にみえようが、出来たと聞いては咽喉がなる。みな衆の来る前に初やりとでかけやふか」

と、それと知らねば相酌の炉ばたに老の差向ひ飲むは一生添ふ婆が、かたみの汁と気も付かず、

「云はれぬ味」

と喜ぶ顔見るよりこなたは打笑ひ

「ウフ、ハ、ハ、うまいか爺様アハ、ハ、ハ、ハ、」

の声の下、たちまち現はす狸の正体、

「うまうま喰べたその汁は、おのれが戻らぬ其暇に
婆を料つた婆汁じゃ、流しの下の骨を見よ」

と驚く爺を突退け蹴のけ、何処ともなく失せにけり。

「エ、何事ぞおのれやれ、どうしてくれう」

と追かける力も張もぬけ果て、哀れ涙のながしも
と、まろび寄つて打見れば、目もあてられぬ婆が死
骸、

「ええええこりやまあどうせうすべもなく、手柄が
婆を殺すとは何の因果」

となきながらを抱き嘆くぞ道理なり、かくとは誰が白
兎とくさ畑の戻り道、柴の戸もるゝ声聞きつけ

「是は如何」

とたづね寄り、

「どうした事」

と利き耳に、

「何じやそりやあの狸奴が」

「ライのふ狸汁をさか様な婆汁としてやられた」

と云ふも涙のむせび声、

「ウム憎い狸めオットよし、この兎が合点、婆様が
敵討つてくれふ、爺様必ず心配せまい、これから山
へ追ひかけて、柴の火あぶりカチカチ、逃げれば海
へどんぶりこ、打よす浪の汐かげん、村の衆見えた
ら後からごんせ」

と云ふが早いかはね兎いさんでこそは飛んで行く。
山又山の小夜嵐、そよぎの音も暗き身の、狸は背中
の柴がくれ燃ゆる思ひの火打石、こけつまろびつや

うやうこゝへ、海近くたくみと知らず土船へ、ヒラ
リと載つてもやひ綱、とくまも心沖津波、逃ぐるを
やらじと兎は木船腕にまかせて漕よせ漕よせかぢ
づか取つて打かゝれば、狸も今は死にもの狂ひ、互
に争う二打三打うけるを刎ねのけ振り下す目にも
とまらぬ兎の早業

「こりやかなわぬ」

と命のおもかぢ、息せき狸は

「ヤッシッシイヤッシッシイ」

兎は身軽に

「ヤッシッシイヤッシッシイ」

寄す浪引く浪、渦まく浪、土船の櫓がひハ重く

「コリヤどうじゃ」

逃げも叶わぬ大汗に、兎は得たりと木船のへさき、
土船目がけてつゝかくれば、汐に甲斐なき土崩れ、

見る見る舟はぐぢぐぢ、ともに狸の沈みつ浮いつ、
苦しむ様ぞ笑止なり、爺は岩根に小手かざし、続い
て集ふ人々が、加勢の声の勇ましく、しゅびの花咲
き勝兎、きたへの杵の連れ拍子、沖の千鳥のみなめ
ざめ、羽音も和して喜びに、明け行く空の東より、
海原染むる朝日影、狸の腹へ満汐のしづまる御代の
絵そらごと、お伽草紙を綴ぢおさむ。